

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-584-3337 FAX：053-585-8488

E-mail sasaeru@kohitsuji.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松義人

印刷所：SRS株式会社

定 価：一部30円

2015年 8月 20日

第 387 号



「正しい」ことをしていると
戦争になる。

つばさ静岡施設長 山倉 慎二

今年の夏も猛烈な暑さが続きます。年々、暑さの厳しさが増しているように感じます。そしてその暑い8月は、改めて平和について考えなければいけないなど感じる時期でもあります。

今年には戦後七十年、昨今の世界情勢をみていると、今我々の時代はひとつの大きな転換期に差しかかっているように感じます。最近の政治の話題ももつぱら安全保障法案の是非に関することばかりです。平和を願う気持ちは誰しも同じです。にもかかわらず、平和を実現するために、さらなる争いが起こってしまいます。

正しいことをしていると戦争になります。それは、人それぞれに価値観が違い、「正しい」の基準が異なるからです。歴史を振り返れば、どの時代のどの戦争も「自分の行っていることは正しい」「自分たちの考えに間違いはない」と思い込んでいる人たちの衝突によって起きてきたと言いうことができます。宗教戦争であれ、民族紛争であれ、ときの指導者たちは自分たちの行っていることは絶対に正しいという信念をもって戦っていたと思います。それほどまで

の強い信念がなければ戦争にまでは至らなかったと考えた方がいいのかもかもしれません。自分が正しいという思いが高じた結果、自分の考えと合わないものが許せなくなり、排除したくなり、打ち負かしたくなってしまふのです。正しいから平和であるとは限りません。むしろ「正しい」という思いが強ければ強いほど、争いや対立、差別などの危険性が増すのだということを知っておくべきでしょう。

昨年創設五十年を迎えた重症心身障害児(者)を守る会の三原則にはこうあります。

「決して争ってはいけない。」
「親個人はいかなる主張があっても重症児運動に参加するものは党派を超えらること。」

この二つの文は、自分が正しいと思っていることを相手に押し付けるのではなく、お互いに理解し合い、尊重し合い、協力し合って歩み寄ることの大切さを説いているように思います。

先日、バクバクの会(人工呼吸器をつけた子の親の会)の全国大会が静岡市で開催されました。その中で、人工呼吸器を付けた重症児を持つお母さんの貴重なお話しを聞くことができました。

あるお母さんは、長らく子どもに恵まれなかった自分たち夫婦によく授かった大望の命なのに、生まれて間もない頃から、「この子は長くは生きら

れない。」「正常発達はできない。」「歩けるようにはならない。」「などと否定的な話ばかり聞かされて、それが本当につらかった。と涙ながらに話されていた。

また、もう一人のお母さんは、障害を持つ自分の子どもをの姿をずっとおぼあちゃんに見せることができずにいて、あるとき意を決して東北にある実家まで里帰りした折に、おばあちゃんが「めんこいのお」と抱いてくれたことが何よりもうれしかった。と語っていました。

重症児者の日々の暮らしは、平和の中にこそあります。平和の中でしか生きられないと言いうこともできるでしょう。そしてその生活において彼らと関わるには、何よりも個々の個性や障害をありのままに受け入れる姿勢が必要です。重い障害を持ちながらも懸命に生きている彼らを、決して否定的に見るのではなく、その存在を肯定し、ひとりの人として尊重していくことが大切なのです。そしてそういう関わりこそが、重症心身障害児(者)を守る会の3つめの原則「最も弱いものを一人ももれなく守る。」ことのできる平和な社会の実現につながっていくのではないでしょう。

子どもたちの放課後タイム

小羊学園は放課後等デイサービス事業を浜松市内5か所で実施しています。特別支援学校／特別支援学級に通う子どもたちの最近の様子を、各エリアを代表して3事業所の方に報告してもらいました。

「がんばらなくてもいいよ」

第2ドルチェ 松本 広恵

第2ドルチェは、浜松市南区参野町の2階建ての事務所をお借りして、昨年4月に開設されました。10年前に、浜松特別支援学校と同じ南区江之島町に小羊学園が初めて開設したドルチェで新しい利用希望者を受けきれなくなってきたこともあり、二箇所に分散し落ち着いた環境で支援をしたいということ、できるだけ生活感のある地域の中で過ごせたらということが、開設への思いでした。現在は定員10名(登録15名)で、浜松特別支援学校へ通学している小1～中3年生の子どもたち一日平均11名が利用しています。

「おかえり」「こんにちは」と学校へのお迎えで挨拶を交わすことから子どもたちとの時間が始まります。何気ない挨拶ですが、スタッフは、この挨拶のときの子どもたち一人一人の表情、声のトーンなどからその日の気持ちの安定度や疲労度を読み取ります。

この「読み取り」を正確にできるかど

うかは放課後の関わりでとても大切で

す。「いつもと違うぞ・・・」と思ったら、子どもたちに気付かれないように担任の先生に学校での様子を伺います。不安定な時は必ず何かしら原因が隠れています。学校の先生との繋がりも大切です。

子どもたちはみんな、学校、家庭での環境、立場が違います。学校では、どの子ども成長することが期待され、目標をめざして、その子なりに頑張っているのだと思います。この部分は、学校での生活を知らない人たちが忘れがちな部分かもしれません。家庭でも、ご両親の仕事の都合やきょうだい関係などそれぞれに事情があり、ひよつとすると案外自分の居場所を確保するのが難しいのかも知れません。

そうだとすれば、せめてドルチェにいるときは、「がんばらなくてもいいよ。大丈夫。無理なく楽しくリラックスして過ごせるといいね」と思います。ありのままの姿を受けとめるのは、時に大変なこともあります。私たちに見せてくれる表情、行動は、心を許しているからと受けとめています。

子どもたちの笑顔と歓声(迷惑かけ

ない程度)に包まれた『ほつとする居場所』でありますよう、先ずはスタッフ一同、笑顔で楽しい時間を過ごしています。今日は何してすごそうかな・・・。



「子どもたちなりの放課後を」

ぱびるす 本多 智代

在宅支援センターぱびるすは、平成18年の6月に、浜松市中区高丘北に児童発達支援事業所(就学前児童)と放課後等デイサービス(就学児童)の併設施設として開所しました。放課後利用の定員としては、放課後等デイサービス10名、日中一時支援10名で受け入れを行っています。対象の学校は、平常で特別支援学校2校、近隣の小学校3校の小学生から中学生までが通ってきています。

事業所の特徴としては、複数の学校の

子どもたちが通ってきていることでどうか。開所当初は、事業所も少なかったことから現在よりも多くの学校の子どもたちが通っていました。現在は、事業所も増えたことから地域を意識し身近な学校の子どもたちを対象とするようにしています。他には、支援学級の子どもは、小学校6年生まで、特別支援学校の子どもは、中学3年生までとしています。理由としては、中学卒業後、高等部卒業後の生活スタイルにあります。卒業後、就労や福祉サービスを利用するにしても、放課後児童のように毎日、遅い時間まで支援してくれるところはほとんどありません。卒業後の進路を考える時、意外とこの時間の支援がないことがネックになるのです。将来の自立には、余暇の過ごし方も大切な要素となります。この時期から少しずつ準備しておく必要性を感じています。

「ただいま」「おかえり」放課後のぱびるすの活動は、こんな挨拶からはじまります。「おかえりなさい」は保護者の方たちにも同様に行います。ぱびるすの日常の活動に特別なプログラムはありませんが、各々に宿題や好きな玩具を出して勉強や遊びを始めます。特別なプログラムを設定しない理由は、学校の終わる時間も様々で、日によってメニューもかわり固定した日課を組むことが難しいということがあります。他に、1日学校で頑張ってきた後に、更に課題

を設定し緊張の中で過ごすことに、少し抵抗も感じているからです。様々な特性をもちながら学校に通うことは、想像以上に疲れるようです。リラックステキな楽しい時間を過ごすことも大切にしていきます。

環境的に狭く十分な配慮はできないと思いますが、子どもたちなりの過ごし方を、できるだけ尊重したいと考えています。子ども達は、毎日通所する中で自分なりの過ごし方や友達との関わり方、居場所をつくることができるようになっていきます。ぶつかり合うことも時々ありますが、反面お互いをいたわり合うことも覚えていくように思います。子供同士の関わりの中で、コミュニケーションのとり方や折り合いのつけ方を経験し身につけていくことを、ばびるすでは大切にしていきたいと考えています。



「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

わかかな 河合 香里

わかかなは、浜北区の北部で静岡県立森林公園が近く自然が多い地域にありますが、今年度より、放課後等デイサービスの定員を20名に増やしました。また、日中一時支援は1日5名の定員を設けて受入れを行っておりますので、日々20数名の元気な子どもたちと毎日をとっても賑やかに過ごしています。

わかかなは、浜北地区に通学、もしくは在任の障がいをお持ちの小学部1年生〜高等部3年生の児童を対象に行っています。現在ご利用されている子どもたちは浜北特別支援学校在学の方が多く、公立小学校の支援学級に在学されている方もいらっしゃいます。

わかかなは、オリーブの樹と併設しています。そのため、基本的に毎月第3週にはオリーブの樹で焼いた出来立てのパンをおやつに戴いています。また、長期休みや学校代休等の1日利用日は給食提供も行っており、おいしいおやつ・給食を皆さんとても楽しみにされているようです。

個々の特性や相性などを考慮し、大きく3グループに分かれて活動を行っています。一番の元気いっぱいアクティブグループは、わかかなから森林公園までの往復を2時間程かけてお散歩に出掛けています。他の2グループも施設周辺をお

散歩したり、室内でお絵描きやテレビ・DVDを観たりして過ごしています。また、マイクロバスでのドライブも皆さんの楽しみな活動の1つです。夏休み中の活動では、常設しているプールでの水遊びを行い、他にクリスマス会や豆まき等の季節ならではの行事も大切にしています。

個々に合わせた支援はもちろんですが、異年齢の方との集団での生活を大事に考えています。一緒に楽しむこと助け合うこと、時にはちょっと我慢することもこれからの将来を見据えた上でもとても重要な経験です。

放課後支援はその事業所だけで支援ができるものではありません。学校・家庭・放課後事業所・地域が連携し一体となって取り組むことで、初めてそのお子さんを支える環境ができると思います。今後も子供の成長を支え、将来安心して地域で暮らすことができるように支えていくことが私たちの役目と考えています。



浜松市障がい児放課後支援 連絡協議会について

小羊学園児童寮で細々と始められた在宅障がい児の放課後預かりから、浜松特別支援学校の近くで「放課後児童サポートセンタードルチェ」として開設したのは2005年4月でした。まだ法律上の位置付けはなく、知的障害者デイサービスマルカートの付帯事業としてのスタートでした。そして、その頃浜松市の補助金で運営されているNPO法人の事業所とともに「浜松市障がい児放課後支援連絡協議会」を発足させたのは2007年でした。

現在、加盟事業所は34事業所となり、浜松市障害保健福祉課の担当者を交えて事業のあり方について協議の場をもつほか、支援員等の合同研修などの取り組みも積み重ねてきています。

2012年、児童福祉法に「放課後等デイサービス」が制度化されてからは、株式会社も含め、様々な設置主体により新しい事業所が急増しています。連絡協議会は、市内にある事業所が課題を共有し、行政とともにより良い障がい児福祉の推進のために協働していくことは、大切な取り組みであると思ってきましたが、設立目的の違った事業所間などのように連携をしていくのが新たな課題となっています。

小羊学園時代から利用者と一緒にお菓子作り教室を行ってくださっていた「ドーナツの会」が、会員の皆さんのご高齢を機に、お菓子作り教室を閉会されました。渡辺禎子元施設長が指導していたレク教室へ参加された会員との交友からお菓子作り教室が始まり、30年以上にわたり、ボランティアをしてくださいました。ドーナツの会は、毎月

**永年のボランティア
ありがとうございました**

1回、西部公民館で行われ、利用者数名で出掛け、パンケーキやゼリー作りと一緒に行っていただきました。利用者にとっては、出掛ける・食べる・交わる機会として、とても楽しみにしていたイベントです。会員の皆様も継続したいお気持ちを持ち続けていただいていたようですが、年齢的に厳しくなられたようです。今後も違う形でのご奉仕を考えて下さっています。これまでのご奉仕に感謝申し上げます。同時に、会員の皆様のご健康をお祈りいたします。

赤い羽根共同募金 受配報告

- 1. 受配施設 児童発達支援事業所「たんぼぼ」
- 2. 受配物品 濃縮酸素器
- 3. 受配額 342,000円

◆児童発達支援事業所「たんぼぼ」は重症心身障害児者施設「つばさ静岡」敷地内で運営しています。気管切開や人工呼吸器を装着した重度の医療ケアを必要とする幼児年齢の利用者をお預かりしています。常に呼吸状態のチェックが必要となり濃縮酸素器が必要となります。

この度、共同募金会様のご厚意で濃縮酸素「サンソメイト」を購入させていただきました。募金して下さった多くの皆様の温かいお気持ちを胸に大切に使用させていただきます。



子どもの特性の理解と関わり方を学ぶ

6月27日(土)に支援センターわかぎにて、児童関係事業所職員40名が参加し、児童家庭部門研修会が行われました。テーマ『子供の特性の理解と関わり方』

法人内でも、放課後等デイサービスを始め児童関係の施設が増加する中、障害や発達の特性も様々な様相を示す子どもの利用が増えていきます。障害程度の重い人たちの支援を主としてきた小羊学園ですが、現場では、違う意味で支援の難しさを感じています。こうした課題を基に、前年度から本部門では、同テーマで研修を行っています。

今回の研修では医療の立場から、天童病院児童精神科医師の藤田梓先生に講義をお願いしました。心のケアを必要とする子供やご家族への治療や支援の様子を事例も交えながら分りやすくお話くださいました。ケアに困難さを感じる子どもや家族の様相や課題も、視点を変えて捉えることで支援の糸口が見えてくるといったお話でした。

午後は例年通りグループワークを行いました。グループごとに話される内容も方法もさまざまでしたが、午前の講義を受け、視点を変えたポジティブな意見が多く聞かれました。日常支援を行っている子供たちの理解をさらに深め支援のあり方について考え直す良い機会となった研修会でした。

小羊学園を支える会

2015年度 寄付金報告

7月 受付分 330,000円 (24件)
累計 3,961,430円 (72件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局(鈴木)
小羊学園法人本部 ☎053-584-3337

編集後記

先月中旬の安全保障関連法案の強行採決は、平和国家を未来永劫続けたいと願う国民をおさなりにした、認めがたい法案である。最近では、この法案に他国核兵器を輸送するかどうか国会で議論されているが、何かすり替えられている感じがして引掛かる。国会で喧々譁々議論した後、最終的には、「核兵器輸送はあり得ない」のだから、後方支援(集団的自衛権)は「まあいいでしょう」という落としどころで国民を納得させようとしているような…。終戦の日が近づく中、この法案成立にもっと国民の憤りをぶつきたい。

残暑厳しい折です。夏の疲れを残さぬよう、お身体ご自愛ください。(F)